



復興まちづくり支援ネットワークの活動

圏域復興に向けたコンサルタントの動き

【東部市街地まちづくりコンサルタント支援ネットワーク】

総括/後藤(古川事務所)06-881-3815 F881-3816/030-920-0160

東灘区/長嶋(新藤事務所)078-453-6378 F413-1140

灘区/細野(コープス)078-842-2311 F842-2203

◆森南/長嶋(新藤事務所)

◆六甲/千葉(住友不動産建設)06-969-9137 F969-9136

協力：岩崎(UR神戸)078-821-8761 F821-8764

佐藤(新藤事務所)06-361-8480 F361-8788

◆六甲駅周辺/宥光(新藤事務所)06-252-1370 F252-6119

◆六甲東/間野(間野がけ事務所)06-942-3310 F942-5540

◇深江 ◇岡本 ◇新在家/後藤(古川事務所)

◇味浜/久保(新藤事務所)06-364-6584 F364-1254

◇桜川/中川(RIA) 06-312-9154 F314-2660

◇水道筋/田中(新野工社) 078-794-5031 F794-5032

【中央市街地まちづくりコンサルタント支援ネットワーク】

総括/山本(新藤事務所) 0798-64-1106 F64-4889

◆東部新都心/小林(コープス)078-842-2311 F842-2203

◆三宮/浅野・林(新藤事務所)06-203-2656 F203-2681

鎌谷・井口(仲和屋)06-252-1201 F538-5489

三谷・萩原(相模)06-946-4430 F946-4767

中川・柏原(新藤事務所)06-943-1371

安田研究会(新大)078-803-1008 F803-1052

◆神戸駅周辺/高田(新藤事務所)06-624-2321 F624-2737

白国(新藤事務所)078-242-3900 F231-1361

◇元町/吉田(COII) 荒巻(OUR)06-243-1002 F243-1006

【西部市街地まちづくりコンサルタント支援ネットワーク】

総括/山口(山田屋)0727-81-3243 F84-9177

兵庫区/辻(新藤事務所-ELD)078-392-1701 F392-1576

長田区/岩崎(UR神戸)

須崎区/上山(コープス)078-842-2311 F842-2203

◆兵庫駅南/尻池北部/奥井(新藤事務所)078-842-2311 F842-2203

山本(新藤事務所)

◇上沢・松本/辻(ELD)078-392-1701 F392-1576

山口(山田屋)0727-81-3243 F84-9177

◆御菅/北条(アールプランニング事務所)06-943-5391 F943-5381

◆真野/宮西(新・地蔵事務所)078-791-8845 F791-3384

◆新長田駅周辺/千葉(住友不動産)

協力：北条(アールプランニング事務所)

鈴木(OUR)06-243-1002 F243-1006

◆大道/岩崎(UR神戸)

◆細田・神楽/久保(新藤事務所)

◆五位池線沿道/白国(新藤事務所)

◆西須崎/上山(コープス)078-842-2311 F842-2203

◇新長田/吉田(COII)06-624-2321

◇淡川/齊木(新野工社)078-794-5031 F794-5032

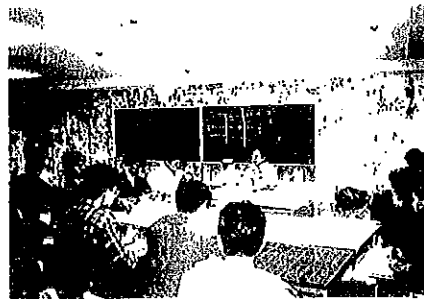
◇浜山/細野(コープス) 辻(ELD)

国建築学会、都市計画学会合同による建物被災状況調査

今回阪神地域を襲った直下型大地震により、住宅やオフィスビルなど非常に多くの建物が倒壊や焼失するという結果となりました。この事実を、建築学会都市計画部会、都市計画学会等の関連諸機関では深刻に受け止め、建物の被災状況について近畿圏の建築系大学が合同で調査を行い、その実態を把握することになりました。

調査は、被害の大きかった神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、尼崎市、伊丹市、及び淡路島、大阪府下を対象に、各大学の学生を動員し、また東京をはじめ遠方からの応援部隊もかけつけるなかで2月1日(～10日)から行われています。各調査員は、住宅地図を片手に、建物の損傷度を全壊、半壊、部分破壊、被害なしの4段階で評価して記録し、持ち帰った後2、500分の1の地図に色分けして整理しています。この調査により、建物の被災状況の全貌を明らかにするとともに、今後の復興計画を検討する上での基礎資料として活用されることをねらいとしています。

【建物被災状況調査に参加している大学等】
神戸大学、大阪大学、大阪芸術大学、神戸芸術工科大学、京都大学、近畿大学、大阪市立大学、京都市工業繊維大学、コー・プラン、都市調査計画事務所、GU計画研究所、石東研究室、水谷ゼミナール有志、全国各地からの多くのボランティア多数



1月30日 西宮市作業室での調査打合せ

※東京の後方支援ネットワークとして、ニュース「じんちようげ」が、パレンクインデア(2/14)を目指して発行が予定されている。「きんもくせい」とは密接に関連しあって発行を予定しているため、全国ニュースはそちらへも連絡・アクセスされたい。(連絡はFAXで! 03-5466-2750)

圏域総括先：阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク事務局
〒657 神戸市灘区楠丘町2-5-20 ☎657 神戸市灘区六甲台町1
まちづくり課コー・プラン
TEL. 078-842-2311 神戸大学工学部建設学科
TEL. 078-803-1029
FAX. 078-842-2203 FAX. 078-803-1029
担当：天川、中井 担当：児玉

復興市民まちづくりニュース創刊!

1月17日(火)未明に神戸・阪神間を襲った戦後最大の大地震は、多くの人々の命を奪い、わたしたちの生活を支えるまちに想像を絶するほどの大きな打撃を与えました。地震から3週間あまりを過ぎた今なお、生活の場を奪われた20数万人の人達が避難所やテントでの悲惨な被災生活を強いられており、一日も早いまちの復興を切実に願っています。

この間、行政を中心に阪神間のまちの復興に向けて本格的な取り組みがはじまるなかで、大学や民間の都市計画機関でも復興まちづくりに向けに実態調査、地区のまちづくり計画などさまざまな活動がおこなわれています。

このニュースは、阪神間の復興まちづくりにむけて、被災した市民の立場にたって奮闘努力している人達が、どこで、どのような調査や計画づくりに関わり、どのような問題に直面し、どのような活路をみだしているのかといった情報を共有できる場となることをめざしています。

このニュースを通じて、復興まちづくりに関するできるだけ多くの情報を集約・整理し、発信することにより、阪神間の復興に向けたまちづくりの前進に少しでも役立つことができればと思っています。

復興まちづくりに関する情報提供、投稿のお願い

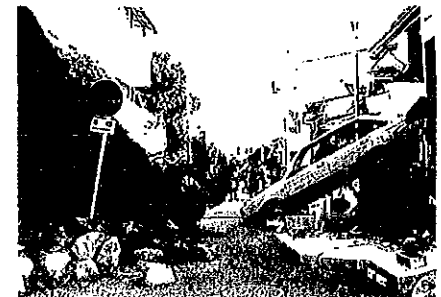
このニュースは、復興まちづくりに最前線に関わっておられる皆さんから寄せられる情報をもとに逐次発行していくと考えています。

つきましては、皆さん大変ご多忙のこととは思いますが、以下のような情報、原稿をどんどん編集局宛にFAXでお寄せいただくようお願い致します。また、まちづくりの現場や活動の拠点に、編集局から取材にお伺いすることも考えておりますので、その節にはご協力のほどお願い致します。

【情報提供、投稿の募集】

- ・まちづくり計画の現状や問題点、他地区へのアドバイス
- ・まちづくりを進める中で知った、切実な市民の声、意見
- ・調査や計画づくりを通じて新たにわかった事実や課題
- ・阪神間の復興まちづくりに向けての「私の意見・提言」
- ・今回の大震災を通じて感じたこと(何でも自由に)
- ・これからの調査や活動の企画
- ・復興まちづくりに参考になる文献や図書を紹介
- ・調査や計画づくりへのボランティア募集の呼びかけ

その他、どんな情報、原稿でも結構ですので多数お寄せ下さい。



事務局北側の通路「きんもくせい」通り



火葬で焼失した取原商店街周辺

阪神復興に向けて

—「きんもくせい」から「じんちょうげ」へ—

〇まちづくり難コー・プラン 代表 小本 有正 氏
「震災2週間の神戸から」

私たちの事務所のあった通りは、何軒かの家の小さな前庭に金木犀が植えられて、秋になるといっせいにその金色の小さな花々と匂いにつつまれる。その幅員6mの道を私はひそかに金木犀通と呼んでいた。1月17日の20秒間に、金木犀通の家々の大半はガレキと化している。

私達の全壊した事務所も火村組神戸支店のご好意で5日間にわたる慎重な撤去作業により、ガレキに埋まった資料と事務機材などはほすべてを発掘してもらった。

おかげで灯油ファンヒーターの暖をとることができ、メモ用紙やワープロを使うことが今はできる。

そして、東隣りの印刷屋さんの倒れた2階家の撤去もせいかくもってきもらった巨大なカニのツメ模 (CATくん) を使ってはじまり、西側の断裂した町内会長さんの家と合せて、3棟の共同建築を提案している。北側の屋根瓦がすべて落ちていた長屋と、さらに背割りの北側で、交通りに面した戸建 (大半が傾いている) の街区共同建築を皆さんに呼びかけてみよう、計画の絵をかきはじめた。自分たちの街は自分たちで、より堅固で愛しい金木犀通の街をよみがえらせる。

神戸の復興事業計画の大筋は被災地の区画整理事業、住宅市街地総合整備事業を基本にした約1,000ha、15重点地区と、それも含めた4,000haの震災復興促進地域 (東灘区から須磨区までの山麓線以南臨海地以北の市街地全域) という枠組みである。都市空間の復興事業への対応とそれらへの「まちづくり支援 (コンサルタン) ネットワーク」がほぼできた。後藤、長嶋、岩崎、環研を中心とした東部市街地、山本、日建、竹中、大株を核とした都心市街地、山口、北条、環再、OURを中心とした西部市街地、広く地域をカバーする形で住都公園の参画も含めたプランニング支援ネットワークである。(4頁リスト参照)

今最も必要で緊急を要する重要事はまず、「雇用の場である産業経済復興」への総合的な取り組みであり、そのための〈機能被害〉の実態把握を急がねばならぬ。次ぎは「人々の生活基盤であるコミュニティ復興」への対策であり、3番目に「都市空間の復興」である。

まさに21世紀に向けた、〈理想都市神戸へのスタート〉であるとも思わねば、やっつけられるか。 1995年1月30日

〇神戸大学発達科学部人間環境科学科講師 平山 洋介 氏
「神戸の住まいを復興しよう」

気がついたら倒れてきたクンスの下敷きになっていた。「助けてくれ!」という絶叫が聞こえてくる。どうにかしてそこから抜け出してから、瞬刻間に時間がたった。救出作業を手伝ったり、たくさん死体を見たり、全滅した住宅地と燃えていく商店街の光景に呆然となったり。パジャマのまま立ち尽くすおばさんや老人たち。私が住んでいるエリアは倒壊率が85%だそうだ。気がかりあせて、何から手をつけるべきかなかなか判断でき

ない。しかし、まずは本業の能力を生かして貢献すべきであり、大学の住宅復興調査チームに参加して速攻仕事にとりくむ。学外からの応援も多い。みんなで神戸を走り回る。いろいろと不自由な毎日であるが、エンジンは全開。

ポルテージが上がればなしなので、落ち着いて考える余裕がない。しかし、住宅復興についての私の意見はとりあえず以下6点。

①住宅被害の速攻説明。不正確な情報が飛び交っている。私たちの調査からは思っているよりひどい状況が見えてきそう。②住宅復興には、自助、互助、公助の3つのすべてが必要。どれが抜けてもうまくいかない。③自助に対する資金・技術・相談・情報支援が必要。④互助の新しい仕組みをつくるチャンス。まちづくり運動をやってきた地域は新しい動きが既に芽生えている。⑤公助は自治体が主体になり、国はそこに大量の資金を投入し、制度面で応援すべき。⑥質から量へ? 避難所の生活はつらい。とにかく大量供給という論法もわかる。調査結果は避難所以外に行き場のない住民が多いことを示している。数年間はそれなりにキチンと暮らせる場所を迅速に準備し、それに平行してみんなが協力して住まいと暮らしを復興していく両面作戦が必要だ。私たちの経験の共有を無駄にせず、以前よりもすばらしい住まいと街を作っていくたい。

〇神戸大学工学部大学院環境計画学専攻 今富 啓二 氏

1月17日の未明、淡路島北を震源とした強烈な地震が神戸・阪神間を襲った。私は灘区に下宿していたが、この強烈な地震を前に木造の文化住宅はひとたまりもなく、ゴォーという地鳴りとともに起こった強い揺れで目を覚ました瞬間、ベッドから振り落とされ建物の下敷きになっていた。一瞬何が起きたか理解できず、息苦しさや暗闇の中、倒壊した建物とベッドとの間にできた、わずかな隙間でただひたすらもがきながら助けを求め声を上げた。周囲からは同じように建物の下敷きになった人々の悲鳴や助けを求める叫び声が聞こえた。もがいているうちに私は幸運にも何とかはい出すことはできたが、多くの建物が倒れ、様変わりしている周囲の様子に事の重大さを知った。

すぐ近くで火の手が上がっていたが電話も通じず、成すすべもなくただ茫然と立ち尽くすしかなかった。しばらくしてから消防車のサイレンが聞こえてきたが、倒壊した建物に行く手を阻まれ火災現場に近づくことができず火が燃えるに任せるしかなかったようである。明るくなり出してから、あちこちで建物の下敷きになっている人々の救助が近所の人々によって行われ出し、私も手を貸したか中には既に息を引き取っている人もあり、自分も一重のところで助かったことを知り恐怖にふるえた。

関西には地震はないと信じていた、私を含め多くの人々の甘さと行政の対応の遅れが今回のような大災害をもたらした一因であったと思うが、今回の教訓を生かし震災に強い都市・街づくりを目指し、一日も早い復興を望む。

阪神復興に向けたとりくみ

—新聞情報より—

<神戸市>

■震災復興に向けた基本方針を発表 —「神戸新聞」他2/1—

〇2月末をめざし計画と事業手法の都市計画決定を行う

・「震災復興促進地域」の指定: 阪南市街地の約4,000ha
— 建物の共同化、不燃化、耐震化、防災拠点の整備を長期にわたって推進

・「重点復興地域」の指定: 特に倒壊や火災の被害が集中した地域で、緊急に都市機能の再生が求められている地域

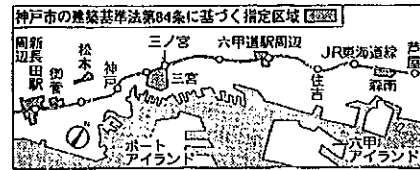
— 土地区画整理事業、市街地再開発事業、地区計画を想定した建築基準法第84条(被災市街地における建築制限)の指定— 6地区 (→下図参照)、建築制限の期間は3/17まで

〇「震災復興緊急整備条例」の制定

・2/15に神戸市議会に提案

〇「震災復興住宅整備緊急3カ年計画」の策定

・今後5年間で恒久的に住める8万戸を建設



■復興計画検討委員会設置 —「神戸新聞」2/1(祝日)—

〇2/7に設置

〇3月末までに、都市防災、都市計画、交通、経済、心理学、医療等の様々な視点から復興計画のガイドラインを作成

〇テーマ: ・災害に強い都市づくり

・都市基盤の総合的整備
・協働によるまちづくりの推進
・安全都市基準の設定

〇分科会により作業:

・都市基盤検討分科会 (主務: 安田丑作)
・民生生活検討分科会 (主務: 盛岡 通)
・安全都市基準検討分科会 (主務: 室崎益輝)

〇具体的な復興計画づくりはガイドラインを受けて、「神戸市復興計画審議会」を設置し、6月に「神戸市復興計画」を策定

現在神戸市などからの広報機能がマヒしており、マスコミ関係の記事はトップニュースでも、かなり確度の低いものが多く見られます。事務局で判断して、かなり確度の高い新聞情報を選んでおります。

■「震災復興緊急整備条例」の概要が明らかに
—「読売新聞」2/5(土曜)—

・目的: 災害に強い市街地の形成と良好な住宅の供給

・適用区域: 東灘区から須磨区に至る4,780ha
— 建築確認申請の30日前に建築内容の届出を義務づける

・新たな重点復興地域の指定: 先に指定した6地区に加え、新たに7地区を指定…合計13地区、約1,200ha (神戸市街地の5分の1)

— 市長が防災に関するアドバイスや共同化の要請など、地域整備の目標に沿った建築への指導ができる

①西須磨地区—街路事業

②大道地区—住宅市街地総合整備事業

③真野地区—総合住環境整備事業

④兵庫駅南地区—住宅市街地総合整備事業

⑤神戸駅周辺地区—住宅市街地総合整備事業

⑥東部新都心地区—土地区画整理事業

⑦六甲東地区—住宅地区改良事業

<西宮市>

■2地区で建築制限を実施 —「朝日新聞」2/1—

〇以下の2地区で土地区画整理事業を実施

・西宮北口地区: 約36ha

・香櫨園市場周辺地区: 約11ha

〇2/1に復興本部を設置

<芦屋市>

■震災復興基本方針を示す —「朝日新聞」2/9—

〇2/8震災復興本部を設置

・都市整備、公共施設整備、生活福祉、資金計画、企画調整の5部をおき、6カ月以内に復興基本計画を策定

〇4地区の復興事業案を示す

・中央地区、西部地区: 土地区画整理事業—建築制限を実施

・JR芦屋駅南地区: 市街地再開発事業

・若宮地区: 住環境の整備

〇未着手の都市計画道路の整備

<宝塚市>

■震災復興基本方針を示す —「朝日新聞」2/9—

〇重点復興地域の指定: 約32.1ha

・仁川駅周辺地区: 市街地再開発事業

・亮府神社駅前地区: 市街地再開発事業

・花の道周辺地区: 市街地再開発事業の検討

・JR中山寺駅前北側地区: 地元住民の意見集約により検討



復興市民まちづくり支援ネットワークの活動等

○住宅復興調査を実施しています

今回の大地震で大きな被害を受けた住宅を今後どのように復興していくかを検討するために、神戸大学・住宅復興調査チームでは、避難所の住民を対象としたアンケート調査を実施しています。

神戸市内で被害の大きかった東灘、灘、中央、兵庫、長田、須磨において千人規模の避難住民のいる避難所を各区2ヵ所づつ選定し、避難所の対策本部の協力を得て、アンケートの配付・回収を行いました。

現在、アンケートの回収をほぼ終えて集計・分析を行っている段階ですが、およそ千数百票の回答を得ています。

調査の結果は、これからの詳しい分析を待たなければいけません、ほとんどの人が緊急に仮設住宅を必要としていることや、今後も住み慣れた神戸を離れず住み続けたいという意向を持つ人が非常に多いことなどがわかってきています。

調査チームでは、できるだけ早く集計・分析をまとめて、今後の住宅復興計画づくりに何らかの提言を行っていくことを考えています。

■神戸大学 住宅復興調査チーム

工学部建設学科 (塩崎・兎玉)

発達科学部人間環境科学科 (平山)

○復興に向けて様々なニュースが発行されています

この市民まちづくり支援ニュース「きんもくせい」や東京後方支援ネットワークの「人町花」以外にも、いろんなかたちで復興を支援するまちづくりニュースの発行が相次いでいます。

一つは、新開地周辺地区まちづくり協議会が2月3日に第1号を発行した「復興」というニュース。このニュースは、「アートのまち新開地の再生をめざして」というキャッチフレーズのもとに、協議会メンバーである住民に向けて、新開地周辺地区のまちの復興・再生計画のポイントや住民としてのとりくみの体制について紹介する内容となっています。このような地区レベルでのまちづくりニュースが、今後多くの地区で発行されていくことと思われます。各地区の情報をお寄せ下さい。

もう一つは、「ふくじゅそう」という東京からの後方支援のニュースで、2月12日に事務局宛にFAXで送られました。これは、東京都世田谷区で以前から市民レベ

ルの住まい・まちづくりの活動をしている梅ヶ丘アートセンターの丸谷博男氏が急遽、編集・発行したニュースです。ニュースの終わりに発行に至る経緯が以下のように書かれていました。

「・・・(地震による建物被害調査の)レポートをまとめている2月10日の夜、突然神戸からFAXが送られてきました。「復興市民まちづくりニュース創刊!」の知らせと共に創刊号「きんもくせい」が届けられました。とても嬉しい情報でした。神戸大学、民間のコンサル、設計事務所の仲間が頑張っています。そこで、私たちが単なる「レポート」でなく、早春を知らせる「ふくじゅそう」としてニュースを発行することにしました。関東、関西、そして東海に共有できるまちづくりニュースとして、ネットワークに参加していきたいと思えます。私たちは東京に居ますので、後方支援としての役割と共に、東京にあって安全なまちづくり形成のために活動していこうと考えています。」
これからも、各地から発信されるニュースや活動などとネットワークしていきたいと思っています。ご協力をよろしくお願いたします。

【復興まちづくりに関する情報提供、投稿のお願い】
このニュースは、復興まちづくりに最前線で関わっておられる皆さんから寄せられる情報をもとに逐次発行していくと考えています。復興計画についての意見やまちづくりの進捗状況など何でも結構ですので、情報、原稿を編集局までFAXでお寄せいただくようお願いいたします。また、まちづくりの現場や活動拠点に、編集局から取材に伺いすることも考えておりますので、ご協力のほどお願いいたします。
東京発の後方支援ネットワークニュース「人町花」とは密接に連携しながら発行していきます。そちらの方の情報提供もあわせてお願いいたします。(「人町花」への連絡はFAXで! 03-5466-2750)

〒連絡先:阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク事務局
657 神戸市灘区楠丘町2-5-20 TEL. 078-842-2311 FAX. 078-842-2203 担当:天川・中井
657 神戸市灘区六甲台町1 TEL. 078-803-1029 FAX. 078-803-1029 担当:兎玉

■建物被災マップまとまる!

建築学会・都市計画学会の合同調査班が進めてきた、阪神大震災による建物被害の実態調査を2,500分の1の地図に色分けして塗られたものが、このほど完成した。

調査は2月1日から神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、尼崎市、伊丹市、及び淡路島、大阪府下を対象に近畿の学生を中心とした約千人のボランティアにより行われた。対象地域をくまなく歩き、一つ一つの建物の被害状況を「全壊」「半壊」「一部破損」「被害なし」の四段階で判定し、地図に「赤」、「だいだい」、「黄」、「緑」の4色に塗り分けた。今後、被災地域の復興計画を検討する上での基礎資料としていく考え。

今回完成した被災マップは特に被害の大きかった須磨から西宮までの第一次調査分で、完成した地図は5千分の1、1万分の1に縮小して印刷、製本して一般に公開していく予定。残りの地域についても現地調査、色塗り作業が現在進められており、まもなく第二次分として完成する予定。

- 【各地域の調査・作業を担当したのは以下のとおり】
- 神戸市須磨区・長田区・兵庫区-神戸芸術工科大学
- 神戸市東灘区-大阪芸術大学・都市調査計画事務所
- 西宮市-大阪芸術大学・大阪市立大学・GU計画研究所・石東研究室
- 伊丹市-大阪市立大学・京都工芸繊維大学
- 明石市他-神戸芸術工科大学
- 大阪市-大阪市立大学
- その他、水谷ゼミナール有志、全国各地からのボランティア多数
- 神戸市中央区・灘区-神戸大学
- 芦屋市-大阪大学
- 宝塚市-近畿大学・大阪大学
- 尼崎市-京都大学
- 淡路-大阪大学
- 調査総括-コー・プラン



■阪神復興に向けて

○神戸大学工学部建設学助教授 迫崎 賢明

「新生神戸のイメージをどう描くか」

これだけのダメージを受けた町を復興・再生する課題はいかにも大きく、簡単にには論じられないが、思いつく点を書き記すと、まず、巨大地震に対してどういう構えの町をつくるのかということがある。つまり、地震（自然）にあらがって打ち勝つ堅固な町か、それとも自然の摂理に従って柔らかな町か、という選択だ。今回の地震は関東大震災の2倍の力が働いたという情報の真意のほどは定かではないが、全てを前例のない地震のせいにして、耐震基準を強化するという式のまちづくりはどうかと思う。現場で感じることは、割に常識的で、壊れそうなものがやはり壊れたという印象が強い。木造であれ、非木造であれ、従来の基準でしっかりつくればそこそこ持つ。むしろ、不自然な形の構造物や、巨大な集中的供給処理システムは大自然の前には脆弱だという認識が重要だ。新生神戸は、真にエコロジカルで、小規模自立型の地域の連合といった町がよいのではないか。

震災によって神戸・阪神地域は、30~40年前に逆戻りした。住宅の質的向上、総合的住宅政策の時代から、突然、量的住宅問題の時代に転落してしまった。一刻も早く、仮設住宅を全避難民にという課題が差し迫っている。しかし、時代は明らかに90年代であり、高齢者・単身世帯社会である。また、この震災で、新たに心身に障害を受けている人も多い。こういう時代にこそ、住宅政策を福祉や医療と結合して、総合的な居住保障の仕組みを創り出すことが必要だ。そうしたソフト・ハードづくりを、避難生活の中で生まれている新たな連帯を大切にしながら、育てていくならば、以前にもましてすばらしい町が生まれよう。

避難生活の悲惨さを前にして、のんきな夢物語を言っている場合ではないが、復興計画の理念にはうわい町をつくらうというパッションは不可欠である。第一次的な避難生活の貧困さは今の問題であると同時に、将来の住宅・まちづくりをも貧しいものにする原因となる。避難所や仮設住宅を人間的なものにする事は中長期的な計画づくりにとっても重要な課題だと思う。

中華料理店「蓬莱」の前の歩道にできたわが店

○語あとりえ玄 代表 速水 敏八郎

「1, 500年の盛土宅地」

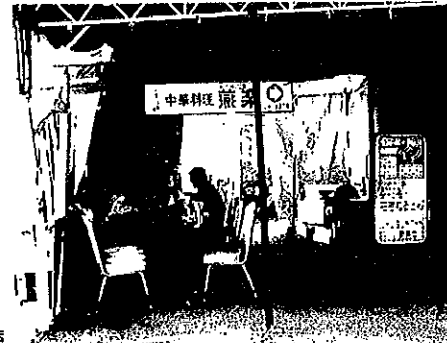
京都(震度5)の大山崎町(天王山で有名)に住む私も、この大震災に驚いて眼を覚ました一人である。ここでも、電気・電話が止まり夜の明けるまでローソクが活躍。明るくなって外に飛び出してみると、母屋の西側の「高(たか)…古い形式の農家の屋根裏部分」の外壁が全面見事に落下し、その下の下屋も押しつぶしていた。他に倉の外壁が道路に一部脱落し、通行の邪魔になるのですぐに息子と取り除く。近隣の家々は見回したところ何処も無事なようで、大きな被害は我が家だけのようだった。(後に瓦屋根の家は一部破損していることが判明した。)

この家の敷地は約1, 500年前前に築地の土砂で盛土した宅地で、隣近所の地山を造成して作られた宅地とは異なっている。幸いにも大屋根は私が移り住むときに瓦屋根からスレート葺きにしていたため(お金がなくて)、余程軽傷で済んだようだ。

その後、URグループの一員として被災地の状況を調査していて、古い木造の瓦葺きの家屋が大部分倒壊しているのを見るに及んで、その感を深くした。

新聞やテレビの報道による専門家の調査結果でも、埋め立て地の被害が大きいようである。近年の丘陵地の宅地造成の約半分は盛土工法でなされていると言われているだけに、今後、盛土宅地の造成法について充分な対策が望まれるところである。

1, 500年経った盛土宅地でも、近隣の地山宅地とは明らかに違うのだから。



○まちづくり株式会社コー・プラン 天川佳典

「保存運動の建物たち」

大震災の神戸の町を連日テレビが放送している。

私たちの自慢の町が落ち着いた姿で毎日毎日テレビに映し出される。

20日以上が過ぎて4回目の土曜日(2/11)、建国記念の日に震災後はじめて神戸の中心地に足を運ぶことができた。

地震のあった翌日から事務所へ居続け、片付けをしたり、作業場の準備をしたりの日々のあと、やっとのこと自力で電話をつないでからは、一日中電話の前を離れられないことになってしまった。聞き取りにくい通話状態でひっきりなしに鳴る電話の応対は、しかも相手が多かかわからないのでいかにげんか返事をしないようにという神経の張り詰めた状態がずっと続いた。その間、三宮や長田区の情報は数限り無く入ってきて心まで落ち着かず、いてもたってもいられないが出掛けることはどうしてもままならなかった。

以前から神戸の近代建築の保存運動を展開してきた仲間たちの新聞記事やコメントを目にしても確信ばかりで、一目この目で確かめたいと思うばかりだった。

土曜日(2/11)の午後、留守番をしてもらえることになって、やっと出掛けられることになった。ちょっと不謹慎な言葉になるが喜んで出掛けた。

14:00 阪急六甲駅から市バスに乗り加納町の交差点で降りた。市バスの運転手さんが「ここから先は混雑が予想されますので三宮方面にお越しの方はここで降りになるのがいいと思います。」とアナウンスされた。ほとんど立錫の余地のないほど混雑していた車内はここでガラガラになった。

マスクをしてヘルメットをかぶり、加納町の交差点の立体歩道橋をわたった。南へ歩いて行く道と道の両側ともビルがガタガタになったり、傾いたりして壊れている。JR三宮駅の北側までくると日本生命三宮ビルが東に傾き、その南側の但馬銀行神戸支店の但銀ビルも同じように傾いて危ない。少し揺れたら柏井ビルの二の舞いだ。その南、今や世界に名高い阪急三宮駅は、もはやほとんど原形をとどめず、すでに放水の中でガレキとなっているのをただ呆然としばらく眺めてシャックを抑すのも忘れていた。

三宮センタ街は昼間なのに薄暗く、土曜日の賑わいだけは依然とかわらないような人通りだが、ただその賑わいの

中身がまるで違う。リュックを背負いマスクをして黙々と歩く人々はどこにお店をもっていた人達なのか、通っていた人達なのか知る由もないが、ただ静かにわき目も振らずに歩いて行く様子は、つい1ヶ月前は華やかなショッピング街だったとは思えない通になってしまった。

生田筋を南へ、新しい朝日ビルを西へ、もう一度南へ曲がると別荘の旧居留地、左手にさくら銀行、右手前方に大興ビルがボロボロになってしまっていてそれでも健気に建っている、角まで来て見上げたとき思わず目の中が熱くなった。『どうして…』。

初期居留地のたったひとつの遺跡だったノザワのあの可愛い小さな洋館「15番館」は後ろに新しく建てられた新館のガラスの中に吸い込まれてもしてしまったのか全くなにもない。もはやガレキすら片付けられている。

高級ブティックが並んでいたブロック30は大きなショーウィンドウをベニヤ板で覆って見るも無残な姿をさらしている。西へ歩くと大丸の南東角リブラブエストはしっかりと大地に建っている、これは大丈夫。この角から南は最も悲愴な状況でカフェレトロのあったトキワビルは跡形もないガレキとなり、明海ビルもすっかり姿を喪った。海岸ビルも大好きだった商船三井ビルもバラバラと壁が落ちていた。栄町へと向かうと心がやはり足がもつれた、解体中で一度でも保存をと言いつけていた建物も地震で壊れた大義名分でも跡形はない、日産ビルも。一刻も早く第一勧銀へと急いだ。

どうしてたったの20秒がこんなにも世界を変えてしまったのか。自然に向かう手立てなしなのか。

あの美しい独立柱はいったいどうしてしまったのか、だれが壊していったのか皆が愛したあの建物たちはいったいどこへ行ってしまったのか、わたしたちの町を輝かせてくれたあの神戸モダニズムは。

見ないほうがよかったかもしれない。

やるせない思いが涙となってとどめなく頬をつたった。

1995年2月11日(土)



タイルのはがれ落ちた商船三井ビルの柱

わずかな残骸を残すだけとなった第一勧銀銀行



復興市民まちづくり支援ネットワークの活動

◆神戸復興市民まちづくり支援ネットワークのとりくみ

3/17の都市計画決定に関連して、住民からの多くの異議申し立て、審議会からの付帯意見などが続き、神戸市(区画整理担当)から当ネットワークに対して協力要請がありました。市民まちづくり支援を第一義に考えている当ネットワークとして、どのような形で協力・とりくみを進めるかについて、現在協議連絡を重ねています。

3/17以降の当ネットワーク全体としての活動及び今後の予定は以下のとおりです。

- ◎3/20「神戸市東西合同連絡会」
・議事内容：復興まちづくりの取り組み－現状と課題、取り組み方策(行政、市民との連携)住宅復興計画の取り組み－取り組みシステム、推進策のメニュー

- ◎3/27「新長田周辺地区(土地区画整理事業)コンサルタント協議連絡会」
・議事内容：新長田周辺のまちづくり計画 新長田駅周辺地区の都市計画 これからの協議体制
・参加人数：17名(都市計画コンサルタント、神戸市都市計画局、住都公団)

- ◎4/5「六甲道駅周辺地区(土地区画整理事業)コンサルタント協議連絡会」
・議事予定：六甲周辺のまちづくり計画 六甲道駅周辺地区の都市計画 これからの協議体制

- ◎4/11「東都市街地(東灘・灘)連絡会」
・議事予定：各地区の最近の復興への取り組み状況 灘・東灘市街地の復興まちづくり計画構想について



3/20神戸市東西合同連絡会の会談風景

◆西宮復興まちづくり計画支援ネットワークのとりくみ

西宮のネットワークではこれまでほぼ週1回のペースで計5回の連絡会をもち、活動しています。これらについての概略と今後の予定は以下のとおりとなっています。

- ◎第1回連絡会(2/25)：・目標と進め方
◎第2回連絡会(3/11)：・西宮市の都市計画等、復興計画の視点
◎第3回連絡会(3/18)：・現地踏査報告、まちづくり課題の抽出
◎第4回連絡会(3/25)：・復興まちづくりと公園緑地計画について
◎第5回連絡会(4/1)：・町丁別家屋被災状況、街区別共同随時等課題街区の抽出、住宅整備の促進手法

＜今後の取り組み＞
これからも、週1回のペースで連絡会が開催される予定です。4月8日には東京より防災都市計画研究所の吉川仁さんを迎えて防災まちづくりについてのワークショップが開催されます。
また、4月中をめどに重点地域の抽出及び重点地域の整備手法・整備イメージ案の作成が予定されています。

西宮復興まちづくり計画支援ネットワーク事務局
〒662 西宮市中前田町1-25 和成ビル2F
TEL:0798-26-7717 FAX:0798-26-7367

神戸市では、重点復興地域(1,225ha)を決定。このエリアは、重点的に市街地や住宅の整備を進める地域で、住民のまちづくり機運の高まりに応じて順次追加指定を行う予定。重点復興地域内では建築確認申請の30日前に届出が必要で、この間に市のアドバイスがなされる。(詳細は神戸市発行「震災復興まちづくりニュース」第4号・3/21参照)

図連絡先：阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク事務局
〒657神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくりセンター・プラン
TEL.078-842-2311 FAX.078-842-2203
担当：天川佳美・中井 豊
〒657神戸市灘区六甲台町1 神戸大学工学部建設学科
TEL.078-803-1029 FAX.078-803-1029
担当：児玉善郎

復興プロジェクトチーム始動 ー神戸市/魚崎地区

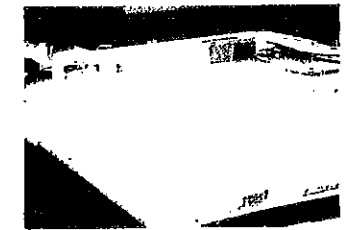
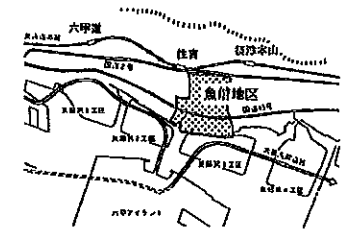
●魚崎地区復興対策本部と関西建築家ボランティアの出会い 遊空間工房 野崎隆一

＜アイデアあふれる救援プロジェクトの提案＞
東灘区の中心に位置するこの地区は、北を国道2号、西を住吉川、東を天井川に囲まれた約150haのエリアである。今回の震災で、地区内の6割近くの家屋が全壊し、233人の住民が亡くなっている。魚崎小学校避難所の対策本部長であった友人の高砂春美氏より、専門家の応援を求められていたことから、若いアトリエ建築家70人の集まりである『関西建築家ボランティア』に参加を要請することになった。

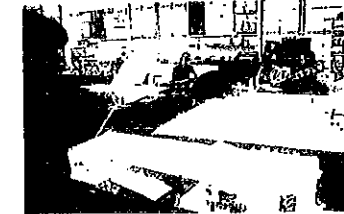
参加当初より、危険家屋を50万円以内でとりあえず住めるようにする『50万円プロジェクト』(北村健夫)、解体作業の一部に住民グループが参加することで復興の資金づくりにする『解体体プロジェクト』(笹木 篤)、コンテナ利用で仮設住居から本格住居へと成長する『B.A.C.Hプロジェクト』(松本正)と次々アイデアが出され、現在実施に向けて準備を進めている段階である。

＜4/9魚崎地区まちづくりシンポに参加を！＞
一方、行政主導の計画にかかっていない当地区のまちづくりをどうするか、無秩序な再建にならぬよう緩やかなガイドラインを設けるにはどうすればよいか、建て替え復興の多様なメニューを分かりやすく提示するにはどうすればよいか、問題が山積している状態である。初期の緊急避難的ボランティア活動が終息に向かったことを念頭に置きつつ、大阪大学の加藤晃規先生にも参加いただき、NPO(民間非営利組織)を射程においた体制づくりの検討も開始した。その方向性の中で我々が今計画しているのは、4月9日に予定している『魚崎地区まちづくりシンポジウム』の開催である。4月に入り学校の始業とともに、外部に避難していた人々が帰還するのを待って、復興への呼びかけを行いたいと考えている。シンポジウムは、既に完成した直径30Mの大テント(カナダ政府提供)を会場にして、地元住民・建築家・都市プランナー・法律家等の参加によるパネルディスカッション及び現在製作中の500分の1地区模型や各種プロジェクトのパネル展示(常設展示)を中心に行う予定。他地区との情報交換も兼ね、多数の参加を希望している。

＊
今後は、「酒造りの道」「魚崎小学校」など歴史的建造物の保存・再生も提案しながら、魚崎地区のアイデンティティ確立を含めたまちづくりへの住民コンセンサスの形成を急ぎ、既に提案段階に入っている計画を練りながら復興への手法を模索していきたい。(3月27日 記)



魚崎地区模型 1/500



復興づくりに動く全国各地の学生ボランティア



魚崎小学校校庭に建てられた30mの大テント (カナダ政府提供)

■ 浜山地区のまちづくり

— 土地区画整理事業の実際

まちづくり課 コー・プラン 細野 彰

◆ 浜山地区の概況とまちづくりの経緯

浜山地区は兵庫区の臨海部に位置し、面積約50ha（事業地区約30ha）、人口約7,500人の住・工・商混在地区であり、今も下町の良さが残るままとりのある良好なコミュニティが存在するまちである。

地区全体が震災を受けなかったため、道路はほとんどが幅1間半程度の私道であり、戦前長屋が今なお住宅床の約4割を占め、近年、人口の減少と高齢化が進み、町全体としての活気が薄れるなどいわゆるインナーシティ問題をかかえる地区であり、総合的な整備が必要となっていた。

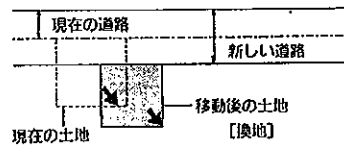
そこで、地区のまちづくりを住民が主体となって実現させていくために、平成元年2月に「まちづくり協議会」が結成され、平成3年7月にまちの将来像を示す「まちづくり提案」を市長に提出した。

これを受けて市では、これまで実施されてきた仮宿、上沢、東灘山手、河原地区などの既成市街地における土地区画整理事業の実績をふまえ、土地区画整理事業を、さらに狭小な長屋地区であることを考慮して集会所や受皿住宅を整備するコミュニティ住環境整備事業との合併施行による事業を進めることになった。

このようにまちづくり事業に着手し、土地の先行買収が始められ、コミュニティ住宅の建設が進んでいるときに今回の阪神大震災が発生した。しかし、幸いにして地区の被害は、長田などにくらべて少なく倒壊家屋もわずかであった。

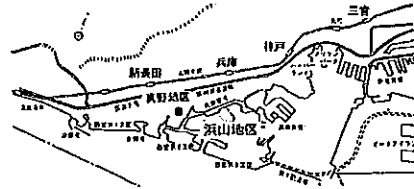
◆ 浜山地区土地区画整理事業について

土地区画整理事業は、土地所有者が道路、公園などの公共施設に必要な土地を出しあって（これを減歩という）、土地の配置換え（これを換地という）によって土地を集約し利用地を生み出し公共施設を整備する事業である。（図解）

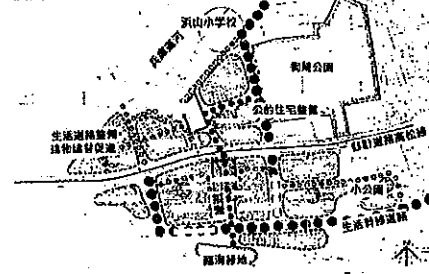


メリットとしては、道路、公園に直接あたった人だけが立ち退く必要はなく事業地区内のほとんどの土地を配置換えし、指定された新しい敷地に家を移転することになるが、この際、既存の家屋を新しい敷地に移動させるのに必要な金額が施行者（市）から支払われる。このお金を元に実際は、家を新築することになる。

また、建物移転の際には移転先に家屋が建設されるまでの間、地区内または近接して建てられる事業用仮設住宅、店舗が提供される。事業費は、現在の既成市街地では、1ha当り10億円強かかるといわれている。



浜山地区まちづくり構想図



浜山地区の場合、事業費は約300億円、平均減歩率は17%であるが、65㎡未満の土地は減歩率が緩和され、25㎡未満は減歩なしとなっている。

◆ 浜山地区コミュニティ住環境整備事業について

土地区画整理事業とあわせて地区の住環境を総合的に改善するため、まちづくり事業によって住宅に困まる住民が入居できる受皿住宅（コミュニティ住宅）の供給、集会所、まちかど広場など生活環境施設の整備を行う事業であり、現在第1住宅（56戸）が工事中、第2住宅（85戸）が実施設計を終え、平成7年度着工の予定である。

また、狭小な宅地に建つ長屋の移転を促進するため共同建替のコンサルタント派遣を行い現在5カ所で話を進めている。事業費は約200億円が予定されており、30haの区域に区画整理と併せて約500億円の国費、県費、市費が投入されることになる。

◆ 地元への取り組みについて

まちづくり協議会では震災後、今までどおり、まちづくりを積極的に進めることを確認し、これまでの「協議会ニュース」に加えて、高松線（幹線道路）沿いの空き地を借りてコンテナハウスを設置し、地元の住民に情報を伝えるとともに、神戸市民に対しても区画整理先進地区としての情報発信基地（仮称：浜山まちづくりハウス）を4月上旬のように設置する予定である。なお、正式名称については、現在検討中である。

■ まちづくり支援学生ボランティア奮闘

阪神大震災からまもなく1年 ころままちづくりセンター 明石 照久

平成7年3月1日から31日まで1カ月間、東京大学を中心とする阪神大震災復興支援ボランティアを神戸まちづくり会館で受け入れました。

1月に発生した阪神大震災で神戸市は未曾有の大打撃を受けました。旧市街地はことに大きな被害を受け、多くの建物が倒壊し、多数の方が避難生活を余儀なくされる結果となりました。このため、まちの復旧・復興は焦眉の急務となりましたが、あまりにも被害が大きくなり、職員だけでは十分に対応できないのが実情であり、多数のボランティアの助力を得る必要が生じました。

まちづくり会館でも2月下旬に東京大学の小山教授からの都市防災・建築系の学生を市の復興事業支援のためのボランティアとして送りたいが、受け入れは可能かとの打診に応じて関係機関と調整のうえ学生団を受け入れることになりました。

受け入れた学生は、大学院・学部あわせて延べ63名で、学校別の内訳は、東京大学40、東京理科大学7、横浜国大5、多摩大3、東京工大3、筑波大2、長岡造形大・早大・獨協大各1となっています。



「まちづくり学生クラブ本部」 作業中の学生ボランティア（ころままちづくり会館内）

訪問者と同室の学生ボランティアの仮宿舎

■ 徳島市・都市デザインセミナー『阪神大震災と神戸のまちづくり』開かれる

徳島市役所主催による都市デザインセミナーが3月30日に開かれ、支援ネットワーク事務局からコー・プランの小林と神戸大の児玉が招かれ、阪神大震災の被害の実態と復興まちづくりの取り組み状況について、スライドを交えながら報告を行った。当日は、市役所の職員や地元建築士会のメンバーなど約50名あまりが参加した。また、地元のテレビ局（2社）や新聞社なども取材に訪れた。

参加者の中には、波路島・北淡町の被害実態調査にボランティアとして参加した方々が多いこともあって、神戸の被害やまちづくりへの関心はきわめて高く、熱心に報告に聞き入った。二人の報告の後、会場からは「歴史的建造物の被害の状況はどうか」「今後、復興まちづくりに住民の参加を得ていく上での課題は何か」「プレハブではなく、木造の仮設住宅を供給する仕組みが必要では」「被害を受けた既存不適格の建物の建て替えをどう進めていくのか」などといった活発な質問や意見が出された。



市内の復興技術者ら約50人が参加した『都市デザインセミナー』(徳島市役所)

計画に住民の声をかき 徳島市役所主催による都市デザインセミナーが3月30日に開かれ、支援ネットワーク事務局からコー・プランの小林と神戸大の児玉が招かれ、阪神大震災の被害の実態と復興まちづくりの取り組み状況について、スライドを交えながら報告を行った。当日は、市役所の職員や地元建築士会のメンバーなど約50名あまりが参加した。また、地元のテレビ局（2社）や新聞社なども取材に訪れた。参加者の中には、波路島・北淡町の被害実態調査にボランティアとして参加した方々が多いこともあって、神戸の被害やまちづくりへの関心はきわめて高く、熱心に報告に聞き入った。二人の報告の後、会場からは「歴史的建造物の被害の状況はどうか」「今後、復興まちづくりに住民の参加を得ていく上での課題は何か」「プレハブではなく、木造の仮設住宅を供給する仕組みが必要では」「被害を受けた既存不適格の建物の建て替えをどう進めていくのか」などといった活発な質問や意見が出された。（徳島新聞 3月31日朝刊）